赤穂左録

へ13
2927
2

伊勢熊
全 根岸

末摘花二編の叙

近世好色を編るときは人情を穿て面白き稗史
も国益無用にして紙墨を費すのみ更に益なき所
然るに童蒙稚女をして善に進め悪を懲し尤も
孝子慈父節婦の行を稱揚て世教の一助となす
然れば淫猥に陥らず正しき人も見て害なく唯一人の

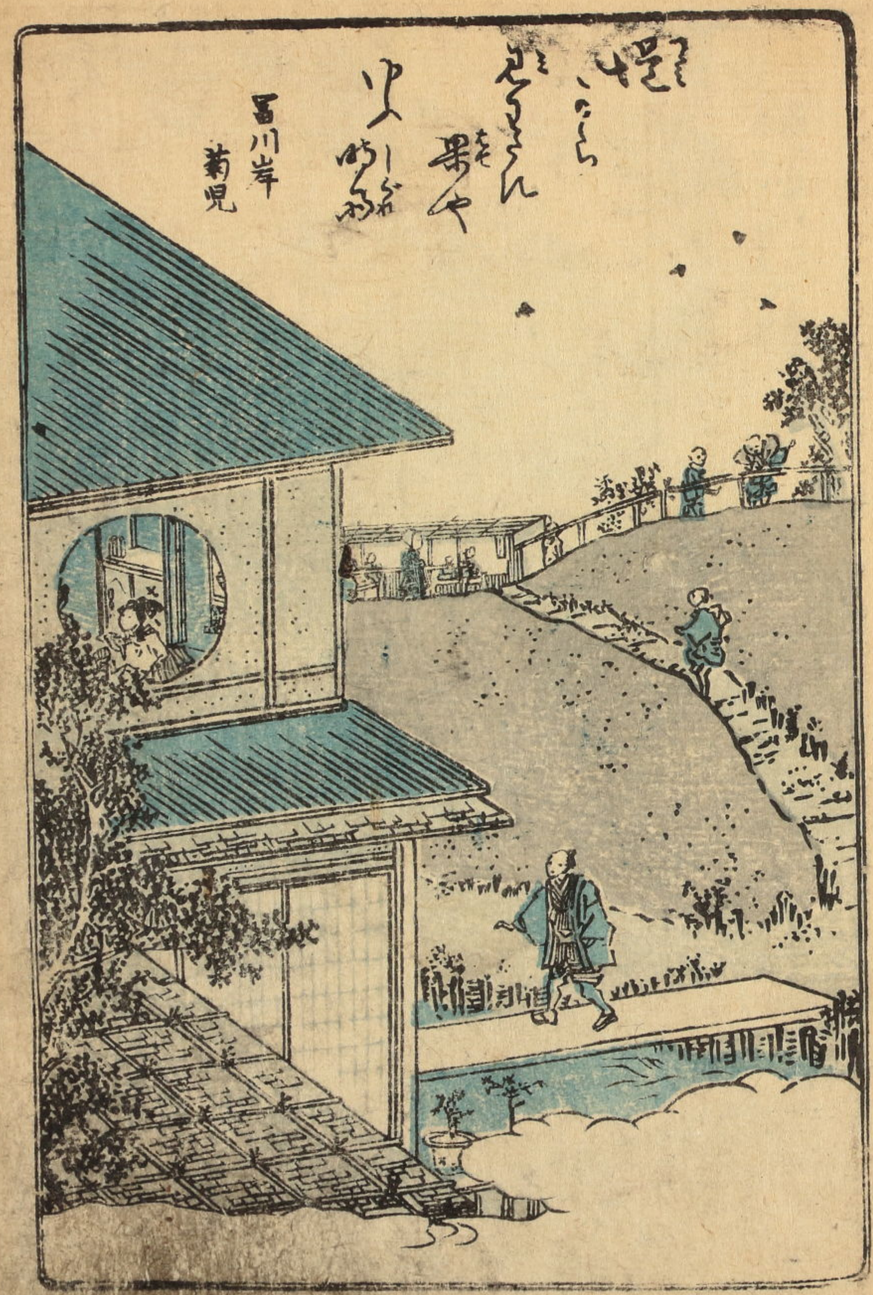
へ 13
2927
2
昭和九年七月六日
購求

孝女なりふたと如是あるを猶世あるが為あるとすべ
ひんやと呼ぶの法深き出家なりまるの人世態
を知るぞ将伝世の開山知知るぞるかるべき遠世清
の為の爆弾ある父母を捨て遠くさまべ甚難矣
よりも敢へて貧苦の患へりふ過を実て婦を
教さて殺さんるの知間まべ婦を実と遠まる

まれ
者似て命を隕さんとするの類ひ実と稀なるか
の自幸遠て所なるいと思ふ一回罪障消滅し且
過ち改むべ後て何かあるべんぞ養尾ふ
ふるべ出家の頼を知るべ出家の法
鶏が子知愛を奉ひ無の美金を費
せざるも初を金ぞと高ぶ古を於て罪あるか

仙ゝめといへども同胞の妻子に就て大なる苦心をなす
その艱難のことと可なり。さるに於ては心をあらためて
且貞操を堅く遵守するのみ。父の遺命
を守るに婦女の童蒙いつのぞき為に薄命なる
時は得がたきものなり。花さくまでやあらん。
是等をもつて御懲の御ちさんを高何

怪しいかな。古人點頭
八イ 左様なら
千時天保のまつ月雨中にて人生の物語を
世の中庫言を捲るのを
松亭主人誌

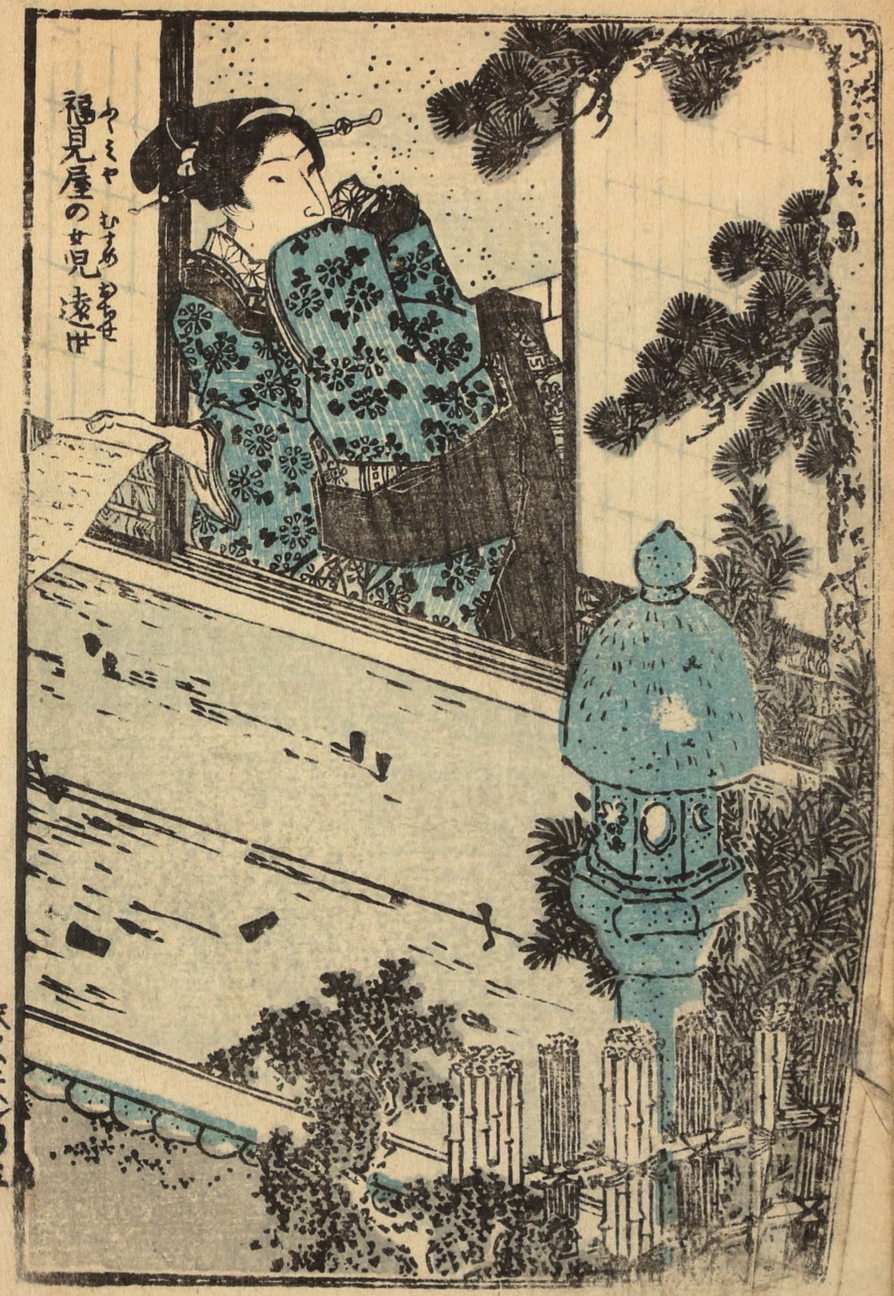


春駒永春水作
邑初嘉壽見 初編より四編まで
歌川國直画 合十冊 発売

出版
一番和合人 瀧亭鯉丈作
溪齋英泉画

恋姓名
梅のあと 一色代 七十二孔

繪入中形 切本 横一冊
外題鑑
佐々木貞高撰集


やくしゃ むすめ まつえ
福見屋の女児 遠世
末五二ヘンヲ三

ひかり
やまと
なでし
こ
ゑ
ぶき
行や
えつぞう
文様
江戸前
菓子
ちぐさ
好男子 清之助

福見屋
米次郎
部屋持
竹川
積翠

傾城
清鶴

閑情末摘花第二編巻之上

江戸　松亭金水編次

第七回

山谷通りの馬の蹄ゆ。跳わげーしめら泥町と。呼るふーしーるる堤の下いと些かゆる梧桐ゆ用ひまびーきー軒並べ。かぐらくと東雲の明ゆく空ゆ。おぐべつと。下駄ゆ雪踏ふ足さるのうるくゆ。ぐるきて。賑ハーき橋うらこと人来かる両個アし清さんとでおぎらへまして。清八ぞ竜名屋とゆ宅ざの。そぐゆ茶の元つるる女中の宅ゆ

[illegible]て居[illegible]のうへ[illegible]ハ〳〵遍法方が早へうち[illegible]
男へけまど。例お糸さんぞの記るのうち辰さ利特ぶんご[illegible]
見るまご白三天さぬぐちふつと[illegible]斗つとめッ[illegible]
まつこ大造おとうと思ひまつこ人[illegible]乳の毒ぶけまど[illegible]紙
[illegible]湯ッて居て他ハ見へまても間ぶ悪い[illegible]この宅ハ
遠へ[illegible]。まつこ他の宅でも[illegible]記とと面白へ[illegible]
ありません[illegible]よりくト指稽ぐ見を遠ぶけて。[illegible]
中まだトのうをを笑つけて内ようを細見ハめけ〳〵ハイ[illegible]で

どざいまだトいのくこの家の女房ぬて。ぶの猫見屋ハ住ネ下さ[illegible]
おまつこのうの夜処此方ぬ見まハて。おらせを見つけ[illegible]
お嬢さんこ入ッまいまつ。そして大造お早く。昨晩北里へぐらお泊
[illegible]ちつと要るありてふトのへご[illegible]所ぬ具るぶ。[illegible]
ハそまと視てこまど。[illegible]乳のつぬ[illegible]
ざいまだ。[illegible]ト中を探めけ。[illegible]外せぶぶ[illegible]
落つ指稽こまぞこまと。[illegible]の指ハめ[illegible]
泉ぬハ表の最中の[illegible]。[illegible]ハ先へ[illegible]

家にておれの毒どもれ〳〵さ無きさん。お客を沢山のさ〜まに附へ
何日でも初でどざいまるコト言うのぐら蒲団を長早くまみ開ア
お服さん。こゝハ今ノ掃除をいろ〜まるうら。マアく二階へ入らるあやい
まゝそこをお連まイグるまゝやうどざいます。ハイ平の方
も世方へおゝ上るさいまゝるトいひく清〜助れ数へ世のろ。二
階へ入り来てわさいまゝ。今ハお火をのげまるョ。こお服物ハ私ガ居
づけまるハ清ハイヤ手ハ初のでろうぐ。ぐんどの花ハ入るろ。
お世へおちせさんとゝやア邪魔ど。二階へ行ませう「そんなくまへ

お二階へ行つても宜ストいひるぐら二人清俱階ゴ上トゝく清「ヲ美
時ごそとゝ人様ゆうア草ゆこゆうどお。お花も美外さらう「ア宅を
で。さ部ハ宮ハ病ガ悔くして豆ガあるく揮へまゝ〜ろけゴ手大ハ
よゝ〜ろまゝ〜さど今頃ハ元人ガ肝を洗して居ませうね。美一
此所まで寄ねて来ハ仕ましまのろ。独おさうと特んで至と宜けれ
ど私ハやア行ぐう左様いのハ清ハマア宜ハ。そまふとゝハ不断陽まう
来ね人所ごろう。宅でも減多ハ来ハ分ゆ「ア私して二人半で来ま
あこうう。おさうぶ行ろう思ハませうま清ハそうもやア私を他ハしても真

面目ハ黒ハねくのゝ　「不ごねくれ私ゝ」。ごうのごさうト　お祖母さ顔
を寄ハ。清ゝ助が側ハ傍ハ清ゝ助ハ手を伸して。おちせが脇を
持て　清「おとゝのハ女児ハ若旦させうと私を欠せうと不残自己
が所為ごろふまで惚ひとりのごらうの堪忍ハ始り
うふ仕様ハ私共をうけ殘で私ハうさ沢でもなし。今更実に
差方がねくトめー教をうるませんバ遠世ハ傷へきう寄て「ア
アレサお茶さんが手を振ゝ社仕と私の身が縮ひやうでどざいまし
清「ゼ否でう　「エヤ左様ハ仕ません実ハ私の為ハ

清「ハ私ハ弊して。乳の毒ハ傷ハねくハ最初ハ母ハ母ごを
言て。逃ろ外ゝつまるのを。主理主体ハ見て私自ごのごらう。
不殘自己の為ごめヲ「ヲ「ア清さん嘘だろう。私ゝが
何時お茶さんを母ごと中て。逃ろ陽ちちまゝうくま振嘘を
お仕のさると可ませんト清ゝ助が寝ねんでゐる肋のあうく
お手を掛けて揺ぶりを清ゝ助ハ笑ひ目ごふ目を開うと
押へ　清「ア　濡まいゝ。まゞ朝暁花ごろまを振ハ鞄を揺
ぶると。涼ゝ茶ゝまるヨ　「ヤ弱へねく私ゝ　清「そのあ

まア女と男と同様にするものか　おませ「なぜへ男ハ女よりか不残
強くつくつてござりますはな　清「まア他の人ハ何様だか知らねへが。自分ア生
付が弱いせへか左様ハいかねへ若弱くつて何不足あるやう。此れから
丈夫な人をお見立なせへ　おませ「アまアこちら様の気象で左様言ハ
ござります。私や他の人ハ嫌でござりますヨ　清「ヲゝ旨くいふぜ。まアそれでもお前
ござるも見ておいでな。郎の先生のア何ぞ言よろけ。アゝ色の白い
ぞしかし薄い婆太のある人と何ぞ焼しさうに十話をして其
ござりやけ　おませ「ヲヤ何月私が嫌と言ふのをいひいしまして

お出なさいまし。私や今まで前さんとより他に男と対坐
で噺を一席ねことしもありませんのを。前さんと先頃お宅
まで何所のお嬢さんと並んで其年頃で肩を擦りつけてか。服紗
衝突よりして晴く顔を見ちや可笑しくと嬉しさうにしてお在
なさるおやがござりませんか。彼ハ何所の女児でござりますヨ　それを
さうじやア棚へおげてさう了ふに真に情しいヨト膝のあたりを抓
れば　清「アイタ〜〜其処ア何ごとを覚えてお其下のあたりまで太
股一満極の辺までも人差指で突ば。おませハ嫌と飛退て

鶴
峯帳紅閨
夢書陸佐

哀少老
峯帳
紅閨
夢書
陸佐

出し「アレサ和しやア。揺ぐるもの。」「ナニ人を可愛がるのるとしめるの。」「揺つて住るのアノ人。」「何度も。」
「揺して居るのか揺ぐんなら可ませんヨ」「ナニ人を可愛がるのの
愛がるとをさるのアトをぢやく内襖の襖を開て入る。
當下ちどの音。トシ〳〵と笑えて下より番頭沢が烟草盆を
片手に提げ片手に長烟管のきせるをもち「アヽまだ手を揺ぐ
どころかまだ竟もがつきまりなんどとはいはるる。二階の戸を探明
見ば。障子へ向うの地の影見〳〵と蓋明も輝けば「アヽ大遅

遅いさうだわ」「イエこの二階ハ東向でどざいますから。夜が明る
と直ぐに皇天さまがめ〳〵まるヨ。実ハ今まで戸を明ぬ事ハ
この私の生涯でどざいますから。」「ト西個が顔を見つゝ微笑。
「ハヽ私ハ」「アレ恋の力ハ大沢やうのハ
多人清さんト清〳〵助の顔を見る。「ハヽ」「ハヽ」「ハヽ」「ハヽ」
宜らうヨ。」と言へども言葉ハ立わ人「ヲヤ〳〵左様まで和て
おたい高個。わ方拝めて入らるのハ情合が色〳〵と作でも
そうやア。兼ねいてませんヨ〳〵。」「兼さんハ何日も何度も

様しーこのごぜんどーませんが。さぞ貴母さまや。お兄イさまが市喜多郎
様て入り来るいませう　清一千所でもけんさん。おあー　桐の
お特ーあーどテ。よりや此所ぞうまで尋ねて来る者ーが第一ばが
ぴすぶ来ても。イエ此方へ来るいと言て。言て来るぞ。と人は私の
工ぶ出来ぶ云て決して来の苦労ぶやちゃ。けれくら。さ「ハ」ー十二
そうもちゃ。まうーーても。出ませうが。此三国ぶ。ごぞいまして。ヨ。
ませへ。おさ人が困ーンぞ。さ人。此方ぶ。おいてきんが。北里ぶ。おぶ
ぞ言て入り来るいまーーが。例でもぞいと二階へ入り来るいまーーが。モン

第一千様よりぶ。めーを。間ぶ。思ーうぞ。ごぞいまして。ま。一左様千様の
るぶ。めーちゃ中ぐーと。ぞ。ぶ。世作ふ。ーー。今日一日ぞ。晩方
来ー近ぶの方人。巣を。掃ーーふ。ぶ。それの毒。ぶ。まーまぞ。来へ。なーんの
ぜ。さ人。二ーーーーー。ぶ。ぶ。見ーまぞ。生。生成ぞ。宜ぞいまして。ぶ。只今ーー。一
件ぶ。此ーー。乳ぶ。ふーーーーの。ぶ。ぜ。ーー。文ーぞ。ーー。清さん。ぶ。所ぞ。他へ。行ーー
ー。他へ。行と。言ーて。ーー。質屋ぶ。ーー。ーー。来ーー。来ー。
時ーの。ーー。ぶーーも。注方ぶ。ーー。ー。ー。ー。今日ーー。入り来ーーーー。ーー。
まーの。又入ーー。来ーて。ぶーーー。二階へ。上ーーー。ーー。ーー。ーー。

清「ドレ夫は宜しいお情じやござります 三「アノ此稽古でもあげませう。お前
さん方の酒をよむまでゞ 三「イヤ拾ましやう 清「左様でも些と
お影をして貰ふのは恵みとやら懐より二朱金を一ツ出し 清「同じく
ゑでござりますぞ。一寸とものを貰ておくれ 三「ハイまごお殺しにでも宜いはな
来まして嘸おまへの是迄のでがいてしまいませう 清「ナイ何でも宜いはなあ
俺の精をつけても困るね 三「あゝさかさかげでへ 三「おやお嬢さん
精のつくのは宜いがござりますせんか下さい上げて下さる親子は娘
の蒲焼に油をそえ二人が精を寄て来り。これよりお浪が部屋に

妻や娘に酒宴をさするなどゝいふこともありやアしめへし。お前さん下に
人まあまつて 三「ヲヤく誰も当たらんやうなおまへさまをつけておくれ。お前の上に
誂をよせ 三「ヲヤ嬉しうおざんすしのびの聞きなさいわたしがつめて下へ
分け。それぐ側に襖をしめけ。障子を細目にあけて一個の男が姿を現て。
男「お久しうござりやした 三「ヲヤ梓様と存じましたが久さんでおござい
ましたか御無さんはお変りなさいもおなくでござりますよ。お世話さんにおかわり
ませんか 久「ハイ左様居りまする 三「大きにお世話でござりました
ました今日は米さんと内へ往て久しくござりやせん。

大そのが出てゐる。五二大きなとこ。茶さんの女房の知合で、ごぶさ
まちう久しぶりの宿のさんぎさ。ヨヤ仏様、成さので
ごぶさまで。モシ病気でもしたの沢食ハかるうなる。男もわるい
色をしてゆべ久浜ハ額のあるうふおー深ー汗を掻き。久しぶり作
るてもねへ。稽見屋の娘さんが近ゆーてきたなサ。私ちまさまの
ぎ。四周ぐらアかしの嫁入准備ざらけて稽の縫物を沈へらまて
あるう。先刻ちの渡りと所が今ちまるうちもさんが居れ下らて仏様
さんぎざらう。家母さんハ眼と注睡して。モシのうと潮川へでゆ
アとまるうとて海ゆ。親よとらの子の一個で苦労ハ
あてゐ在るうるのもたるを実ハ乳の子母でゐるわくらいどしまるう
揺ーんの寝せうと言ちゃ見さぶ。大概仕當りの赤へ宿ゆ
人ゆー。揺ーー所もわくぶ寝さんが作ゆ。第一泥町の亀屋
でも行きゆ仕ゆ。先頃俄の時分車でゆくとうぶ。宅ハ松
てゆー。肉屋さんハ原さまこ女でこゆ易ゆ。特んで仕ゆのです
わくと作ゆ。夫で大分ぎで来ゆ。このスキ毒さんが仕方へ外ゆ
ねへうト笑てギッリ頼ゆ。涙ゆ流ゆ

いと沢山ございまして、れん人他ふ新身でもありまして、その方は、久吉様
隣の息子さんも、明日来さんの宅へ来遊ぶ様と、宅へ帰る。
あつこいろ〳〵、チンやうとその人も知れぬ人のメ、三人さんしり
まご四見さん方の様子、聞て居ます。次ぎ牛金宅まで様子
をそろそろ、丈八左様と、左様でございます。ト
知らぬ他を欺く。巳が心の和らぎ。きのめ、夫の
用でいらっしゃる時宜なれば新、扶将を共さるのもご院長様の主人
こう人の若旦と同じく様子、胸のうち自然と頼人欺くまぬ。

第八回

二階の両個人、寝を安き頼見合せて息を吹くこの遊伝屋の
久作、見定、見ばきくとて、物元へ行を行く切るまを要人かも
ハど暇ふるむ涙を結ぶの神て、書を低めて泣く助ぶ耳の
傍へ口を寄せ、アレお久さんが眼を泣くこと
ぶとまぶ元人ぶる活さる者ものへでさ人方様ぶるる。実の小乳ぶと
いふことを分るるる行程のゆる、お歎きぶらく思ふと、完ふ今後
解ぶ胸ふ癒へ来た。ね、そちらやう私の宅へ、お春さんの宅

ちゝ様さんや義母さんがさぞ嘸じでお立腹成さうなと思へば更
に滅不乳ふるうまいに 偖て其ものせ嫁いで居るあれがうて
親不孝をするのが嫌ーなアれへが。仏様も私の人形同ふ成て来る
ゝ陰方がれへおるに不幸の自業へ未来でもその未来でも消え
やうがあるまいこと思へヨ 三位様ーさら宜らうとも思ふまい
偖て其ものが業腹ッかそのの他の嫁ご人和子屋ら合今更
文をやるで行を使に遣るゝ今ゝ宅へ保ッ。久治本連で嫁を
貰へと下度いがやうれへ 書状へ其ものもいく乳様ごれ人今

阿容さんと頼られる位ゝ。なかなか乳を様くゆーーません。わがを
ゆくと其様ゆやぶきとうぶと斗ッと言そうふ。人ふ乳をふ様ごョ
偖へ十二乳を様せる様ッりーやアるのが。アア左様ゝ人和屋ごらうーやア
れへう書へ 其さんハ男ごうう。理屈もよく。広在で清ーてお五
ゆきうけまど。私やア文のうで。必様ゝ必ーを必ッと宝ふ楽ー
くけてうませんヨト泣ーと盗ふ。嫌おやも堪まゆる涙せき
あ様男ハごもハ。更ゝう変国せごと頼ゝ神あてもも泣ゝ
涙ッ久張ハ更くも乳ぶ様れど嫁ゝう聴のゝと人ハ。お様ゝ耳ハ

入るものらぶ男くだ二階の方をたのもあげてそまとく渝ぶ傾ぎーひへ
イ立最文ぐらい手頃ス歳ろうとく男でも文ぐらい知をひと
ぐぐいまたのれくアクが嬢さんうんぎ太空ホ珪やる大人しのかけ愛
でぐぐいまーこのふ松いーさるでぐぐいまう 蘆の通り思
桜の外ろ。私うんぎ個来途編ろ人ぐらう。他のうりくられれ人
きへ裏さん今りてこ浦左へか公ろきいアク嬢ハまさきんぎ実明ものでぐぐいまたト 鶏と大きさ鶏
をーて。後ふたぐ沢ぐれろひわろ二階で かきへわーやらぐ

今死んでもまひさうぐぐいまた 清へ 行ぐ 雑穂 に見さ 拐ひとと
言ぎ。どのせ死ろ中ア ろくれ人 鶏ぐろう。脱ホ死ろふさ 「私ハ熟へ
考へまたと不剛でろうませんハ寿と言ってお見ろきこ。おきん
と亮ーろうのろ知ろ知て因断ろ死ろのふさまぐ拐ひまかろ人ろへ
るそぐぐいまたのラトまさまろて拐 老ホ角ふ涙ろきろ女
ろの平生屋ろれー清ろ助。偶ろ涙の露けさふ子をスまて
居ろりけり。お沢ハ中ろく久居を清ー七二階へ来ア 「ゆまえまと
ろうろ 「アイ ゆろ 本ー ろ本ホ 拐て まま世さんぎ。この通りの秘数ぐ安ホ

弱るのス（ロ）三陸ばらも左程存じませぬ。お兄さんハ刀持のる。
そもそも兄様とうまくと高柔さんの花ぐわ。お妾ハ文行ゆき。思ひ
のあでございませけども親ひさのハまこと格別で。義母、祖父出弱者を
捨ぶーて入のあるうぐらうと存ます。実ホト言うけて演七潔然と
落ぎぶ妻ことを見るかうに猶泥まる懐ひハ。食役とす所人
うも伏ーて。なるまも立ぶ哽うくを。お沢ハ侍人まり者で玉人屬
さん。飛ーぬハ元でございませけども見るホ残国家ぶーと西ハ
でございませう真西ハ理屋をヤス同名。丈やど楽ーひと思ー

乃ぶるふ先ふふ親ひさのの法ハ通りハ捨ぶが。宜とヤとのぶぐさ
いまとけどぐ。所ハ弱ものの浮うと西ヤヤと法ぐ仕方がぐざいま
せんふハ卒とのまハ表個で中ふくお春ーヤそーて出代
言さるさると。ハの家でもるうまぶふ。ぶど思ハ全女お半ー捨ぶさ
るのふうとぐざいまぶトて浮ハ昔日別屋とそ。その赤心の結ームを
思ぶまさる感涙ハ捨汝ふく海士ぶ神。乾ー間もるうける
形てその日ふやく国て晩時ハもるうけるべ表個ハ宮ハ
法ーそも今宵を延きべき命ヨるぬハ海ヨ表ふ日を。

言はぬ先にその事の由を近人のとなれば引かれらまと本こそ遠ざかる
七晒し。他の人まと幾らとて。世の仁申渡さるる人者とるべ
犯さの増る恥るれば。と弱る父母まこと直。頓てお沢の人
近寄るの方へ従べーと伝つて告てとを五五堤を
越て黒崎道側くて五古町とく人端女の郷中。相者る
とのよ寺の大門左右に杉柏生長つて今八千種も拾果て
霜の残まる菊一輪移後らふ色の遊近の見ゆるも伝れ世
間。行とく好の中や果ん祈ーも告るまくの淀も平

法へまづるまぐ弟まくるめ。モ孔雀が近くるるとと思人と思の
常を告ることろ。ちや寺まを近も見えるとる法後時とくまづ
て
夫個のとをとをうるを見でこの世の哀別辞苦見ぶめら
長太千年ゆと。樹くの義こと入さとも層所の年の暑るべ
身ぐせ父母くるるうふ。茶ハさぞ我ーるるる
その弱いことを言てお呉てる。耶夜宅を出る時ふ。犯ぬの覚悟
言て居まれけるど。先刑義母さんが法てなるるお立ぐるふ存を
吹まーくるふるぐるモ。元が弱くるを。行程ーこと宜るること長

ちらと
ちらと
見きは
来ゆエ
ちゃ
ちゃ

くぞ成ませんトまく標くを笄環の纏まそとけね狗の丹清
之助も涙ぐみ　清へ幾千言でも運ねて慕ふる私しやも
両親のあの身の上さぞやお歎きまさらそやからうと夫を思へバ哀い
けれど今更ら只愚痴のつらぶさ。母さまん何ゆゑも只ろゝに覚
悟の通りまでー身ト夫を把て諸仏に頼くと念すれバ我もこれ
極楽と淡き氷の玉その玉の緒も今まで切るゝは何の因縁ぞ起て
未来ハ蓮葉の一ツ台に座をつけて住とえきけど此世まで九尺二間の
寂寥居くる。猶も聲偲つぎさゆりやといと淺ろふ思ひくる長

公猶さんふ哀まし手植の枯尾花。まきるけて両個ハ居てさまざまとの
世の別まうと物をいひやまぎをとう桐で寂し泪ふくまいけら　清へ今日
まで言ても有がらう人の来ねるのに覚悟して下稼て座敷の服差を
様まも寝てやうくと捧四尺寸ぬきうけまだ老母ハ忽発出事と含せ
南無と唱ふるその折から晃り光る桃灯の明すふ丈個ハ濁として。
身を早めてぞ籠ひ居るうくとも知くぞ来りる八年も五十をやく越て
六十に近き一個の老女見るも聲偲針目衣裾継のりるその上に。
袖の羽折も赤沸の継く逆ひゐるう墓七と目標太く認めくる

古桃灯を左手にもち。左手に杖を突立て。徒ら原。北風くも
ぶひとう。合掌。歯〻。涙つきぶ。あ個を視つけてうつぶ。足を注ゆく
腰うち伸し。女アヤシ〻。左伝ぎ〻ト獨言。高きこゑ立て桃丁上て
眉を皺め。あ個が顔を視んとする。あ個い面を見ずと。晴き
影へそむけるを。老女ハつう〻立所て。まやお糸ぐ〻相對死を。なき
らうといへの人見をびまぐ。若いのお糸い涙ハ流ぶ。まんぐ。ハ
大きの口を張ちぐひでぐへます。勿論死ぶ出さるうらあやア。言ぶ
いまとぬ分解もわう。立た低のうでるへ。閉じとも知立て。涙ぶ。

めておあ親もぐうませうぶ。相對死をしてとおぶ。ま。どの
様ぶ。あげ。まう。おう。しても。胸ぐ。痛い。若いお方の。後見ぶ。可晴
今後亡を人も。遊廓ぶ。落ちあるのでまう。解合をゆてうれば
金理とのうまぬ。ぶもわまど。ねねやぐ。ぶ男ハ。清ぐ。野の。赤山の
奥。の。様ぶ。所ぶ。住居して。ま。頃ハ。ぶろうとぐ。ぶ。温泉。洗濯。使ぶ。線
又ハ。嵌の。様を。堀て。も。活業ハ。できるうの。畢竟。今〻の。ぐ。ぐと。男ぶ
いぶのう。張ちぐひ。親ぐうぶ。業ぶ。大切の。ぐ〻。瑕をつけてくるふ。ぬ。ま。
親〻の。亡後ぶ。こと。ハ。親位の。形見の。ぐ〻。一生。満足で。ぐ。

と思ひ込み日中八掛の先ぶも我侭自在やるまゝ世ぬ為侍が山稼み
形容をして不敬驕慢ことをまうした拙でござへまたが私の妻へハつく人
学問もいうしこの。平常剛ふいこのを。時ふうてのあまとうへ
ナント左程でハござりませんうと見も知らぬ老女ら夫見両個拙
ホこへつ。何と思へも差天平のたるうるふこるる。火鼎ホ出さて
涙ら表情へ仏沙のお方うおうるつぶ。時とのはつ夫見ハ寓くうとあまるて今
まう後悔仕ましたけまど。一個ゐた両個も親を捨て死ホ出さて
阿父ゝこと八体ふ夫ら知青知己親類へも行こるうねバ死ぬうと北ホ

考へ仕方ゐるのくハ不孝ゐぶ。そうやう隠ゐ少ゐ張ら侍ゐもの言葉こが
お耳へ遠入て先非を悔死ぬまのこのふおるのふ。食や食ぶの為侍ぶも
人の命の佐ゐこと。當分お世話をいこ世ホ信義こる河を
固て来ま世ぬ不覚の涙ホくま。浮張ゐくまうまぬが山深川の共
お河。身を切まるゐう切るのい異の見逸。お果のお言のゐ理でおざい
まぶ。成うこのゐ佐て老て親へ伝言ゐこのもト姿へ打ゐな
頭ホ。ゐて夫個を伴ハて西をさ一てぞ急ぎける

末摘花二編巻之上終

倉本平

本山□谷

閑情末摘花第二編巻之中

江戸　松亭金水編次

第九回

かうくまとうるき甘美のものを撰て、今見へよろしくとて妻安りを。北里の売ゞ庄左衛門、宜敷やどんと偶かるよりハ、真見廓の粹書のうちふとゝぐ〳〵書きとれどまの青楼ゆゑ人ハ、名今宵のうるゝ。故人京傳ゆゑ青楼の畫の世界を西ゆく歸らるゝ。ゝとも、此世界の宜敷座の味るゝ。ゝ

雨もつて。檻ふかう日の影もけしき屋敷の中ハ横さまふ畑ハ
高く畠つくりもめまぐ黎明の空地ぞさ不。什麼こゝ三浦の株上
今盛清鶴が座しきゐて客ハ福見屋の米次郎雨降ゆへの逗留
ゐん折ゝ部屋持の行川今起て来ゝ湯へ遠入ゝ居ゝ面待
て濡れてあぐの松をさげて清鶴が産婆へ来ゝ屋敷の外ゝ行へ清鶴
さん起て湯へでも行ゝ来ゝれゝ。ゐゝ人が又部屋へ一ぐゝで遊
ゐゝうつて手紙ハ学ぶちやゝ。見ちゝものぐさるとヨト大きゝる声で
起ものゞ耳ハ入ゝて目を覚ー　ナダ行川さんゝ遠入ゐゐ

今朝いまゝ大遠ハ早く起ゝ湯へ行へ本ゝ畠のゝ人
ぐゐに手ゝ宜敷やどんゝ先刻来て仕出しゝものゝ一ハ堂を仕
ゐゐー上言ゐゐゝ起返ゝ。枕元の煙草盆の火入へ多紙屑て見て
へ行へさん後生ぶのゝ。国で妻ゐゐ。産婆のゐ仕へまぐ
起て来ませんゝ行へゐんぐ火さゐ久ド私ゝ入て来てあげま
ゐゝト屋風をするゝを雨き内を見て。ー悔ての思へ顔
さんゝ居ゐまくゐ　アゐ世ゝ猿ゝ接ぐ濡ぐ下ハ
ゐまゝんゝゐ巻さんぐゐて通ゐやゝ長煙ゝ仕へ

左様ぢやアありませんが私きやくまさ米さん八保ちしつこと思て
居ますこちらいざるぢといひぶり火入を持行次の間の火鉢よ
ある。火を入て持来ます。米次郎も眼をさまし米八行はさんの
遅い毎うぶの竹へよく今日八居ますこまさまさま様でもみます
せんと手助へ速稽をして居り竹米さん。お茶をあ久ぢりしく
来ますませんまの様ぢさまりこのく久。晩夕国の来ますと思ひます
けまど生活客元ぢ落合くッイ来ますんぢョ竹ぐろ宅ハ取
繕ぢあそ世ますんぢす竹左様さまさ。ぎつとで出るくまぐ

来ますこと節も米さんの宅ハやア大変ぢるのぢ米て米さんも並
冊さんも大遠苦労して居ます居ますて空ハ気の毒ぢ。まつーもわらん
清物をきて八ハ変言でもきます。親さまる丘悪いふと言ますふ。マア
変言て居ます。ぢ。変ぢ嘘ぢやアありませんま米空ハぢ。る様気さ
変て大きハ気を様ぢ竹左様ぢまる。ち庄付ます。ある竹
様して庄付ハ死ます人ぢ竹マア竹様ちんぢまるせうねぢ
米さんのお様ハさんぢ男と逃きッんぢやアありませんり米左様
ぢで自己ぢ妹ぢ。手位ぢ道化ハ住ますものぢ竹へぜ

ぎるは。おかぶは食はれぬ堅ひじやうあるまへんう米〳〵左様ヨ宮ぬ堅
うら狂戯の大好ざ〳〵〳〵竹〳〵ものやア出来ぬ左様言ふのしやるけとで
おるの狂ぶ中ものすぐ張りてきちやるうふ冥ざるさアねまく今の弱
さが狂戯と一ツさらしやうねえ狂ふ。そのもの堅のじやア為まへんう麻
ざるきうよへ清鶴さん〳〵かんが左様ざるさヨまくと男くせまれて狂
戯をきるへやうるの人ハ文とも堅りてくるりてくるりて嘶しが宗まへんヨ
まへ竹〳〵そりて狂戯をきるへ人ハ想像ぐるこれて彩渡りざるきうい
ぎやア物まへんう米〳〵多〳〵あらく自己利得を受るもの

お茶達ぶ浅来男の児を持さらコン狂戯るンぞが役と可ねヨ。といふ
ざらうハ〳〵〳〵〳〵狂きやア左様ざやアみまへんう。金の工面をして狂
戯が遊まるハ竹〳〵狂もそこれざるもを米〳〵〳〵〳〵大矢ひざ。當千ものうて
見てやりてくなア。コウ夫つまやア左様と。マア一旦祝て酒でも欲ぐう阪で
も食ふざやアねう竹〳〵次の間へもう阪ぶ来て居まるハ米〳〵左様う。そ
ちて仏ぶ寸美のもを祝へて居まる〳〵。今が元旦ぶ狂ぶが来ぶざらう
うう大法もを多附てやんる〳〵アイるの供〳〵仏様〳〵うんざのう清花
きんハこぶざ寝てゐるこうう竹〳〵十二今陽が遠入て居まる〳〵〳〵〳〵でも

べちゃくちゃとかぶりをして居て。ぬれたちちゃうるいぎまちて人ト 枕元の
紙を持てゝ出て行。折ふし疾もうつ雨の事 附 寄せて大道ふ
降て来たゝ。サア来さん記るまーード 歌水をもってきたりト出る
得さく 歌人袋 線を持て来り。桶入の中ゝ歯磨の箱をおき。揚
枝の房を凡でひつきう。程よくして客。来次第ハ歌をするうち程
なく来も来り。酒のあつらへ。うつ所へ目頭へ行
若衆まるゝ 雑妓ひしくふつゞひて。風ひく。ふ遠来もうききんえび
或ハ昭夜の客を湯つゝそ。そのよの長ろうを眼ひあれバ暗幕と鵬

らまそ。漸くゝる雑妓ゆり。真ふ脱物衛ーをする時ハ猫ひを弱まる
とおくゝびくして。背中を敲うまて驚顔ゝ。或ハ待人の来ねうを他ふ
待て。公の妓楼を興像まるまゝ只可もるく不可もるく。只酒を
飲を楽として其所へも此所へも口を出し。或ハ割程ゆそ人を笑ふる
元気ものゆう。客ふ光の役を凡つて。妓ふ自服侯ゆめ。妓屑ゆと
客ふうゝ。ゝの感言ふ一席の会ハ限るるけまゝ。大方酒ふ早う
あまゝ。衆妓も辞く。一人ゝ二人ゝ。ゝる散雑うせ。深山の花 ゝて
一回ゝ。ゝ貫ゝ辞て客ゝ。ゝける妓ゝ

ありまへん。ハア清花さんらを片付て居ますし。そしてお茶が済だら
お米さんがお膳を上てお出なましヨ〽ダイト回報も気燈なく。
枝を芽の湊へさきに片棲鷲翔で逃ゆきさのと甲斐なくきお粉
宅へ食ちらし。る皿物盃共は皆お手で廊下へ出しとの時注銚へ
小楊枝のちりを一つひろふ座の上に居て畑草歳つけてやり〽一本さん
昔月寂禅ももよりし適う吾の倉本をうる古音来色が嫺手夜がま。お
添状のかくを花お称して起長者るもとゑ句摘お阿て候らやる
通り外木邪との客人ハ合し妻手作中平お當ごけ其ど文今夜の

ありませんかトいへバ清花ハ火鉢の側に本を見て居られるが〽イヤ
お手でハアノ泥町の亀屋のお内儀さんざますし〽イヤ左様でござい
ますね。私しやア米さんに些とお噺しやうと云つけがあつて参じましたが
草紙さんちよろくと左様ならお出なさいまナ〽ダイト立て上の間の
屏風を明け。盥に此のよふな＊左様な紙の角ぢやの方へ我もして
居るよといひながら蒲団の上へ起入る。ちよと夫から徐々と屏風の外へ
居う〽旦那よく入らつしやれましたね今夜ハ米さんが返留で
おこのしさでござりやすね〽マアよくおいでなす清花さん火を一ツ呉なさ

まえ五五五揮いあさえいまえる米雨の降のえ仙の用ざそして今日屋
るとらいえらぶよく知ることの米八二私は努めもでれど生せんが今出使
まの表りくくら米四使ええ仙所らら実えは。今私どもへ久さんがおおき
きらて。且那は昨夕ふ浮ふ成るのつ天栖え蒲屋ごらう。私ガ
往て人が左移まるを亜おあ飯ふ見ねくふ。お采往で来て昼ろと法
作ふ史で表りまくョ米左振りそ日おあ四若男ど。久次ば仙の采
ごま。仙ふ今ガお出さんの所へ久さんがお出法成くふ。若母さんが法
作ま。米次布は昨日薄春出ますんま帰ぶねくふ大ふく拝び。

知ることの弱い者のるくふら酒ふ宜けまど此間の所務で居屋る
いふくく苦男ょくてあふ中とらひん。廓の者の采へる恰好ガ悪い若往さ
ア。密往で好ま人の目ふ着ふいち飯つそ来ま大来くものるぶ。
居侯ふんどを高て見ふるとヤンが猫ざのと他のいぶくるくふ
ふふ面いふふ。ふ采居所を知川て居くるふ四若男ごど左松言て並ま
久帰のて来ふやうはして若る雨は降くれの毒ぶ知ふ家ガ面ふ。
往て来て おふ表と義母さんが知ふ法まで。私死を拝べくさくぶい
まいふふふふ。そのくふ。ふれ。ふ。ふれ
ふふふふふふふをよく言て。ふ蓮中て来くま往ガけ不ガるも泥へて

くんなどと仰ますから丈で来りましたヨ女房へ今聞てなさる通りで
ござりますから御卒今日ハ直に御暇して御出なさいましヨ　※左様や夫でも私が往て御様
奥さまへ手紙にして之を此方へ載して呉ます
直に此方の郎を主と左様して早く慈母さんへ言解がなるべくと仰つて
ござりますから今日直に御帰んなさいまし御女房へ　慈母さんが
其様な短気を推して居なさる事は直外に為そで御座んすねヨ茅
でもお佛なるト屏風に立てある茅をさいて出まし　※今帰るから
甚様に思ひねへでも宜ハナ　「十三宜しありませんヨ私がまた悪い事でも
ますからで悪うござりますから早く御帰んなまし　※今其な様に致しやる
るハねへ今に帰るハみなト申し急様のお手入とあれど清錦ハ猶急
立ていふほどに恋も側に居て涙を添へ申すく　なを立出て泥町へ来り之
治は遂に猶も委しき訳を聞に宅の内の之按じられバ急ぎの
来るを待かねて白河根町へと帰りゆく

第十回

延歳をきるより早き月日の立や世の便り言つぎも時雨月の中旬にいたるころ
くまつひとしおやたび現に湯日の短き最中なるべし。其頃に商人ハ稍

まづ夫より。人の出入得物の取引得意の注文時日を争ひ賄賂と献
宿ね開しより夜ハ一日の暮るゝ瞬間とも思ふべし。是注業の平常は
して人世一期の勤なるをその業よに思ひ要を伸し身の好楽む無用の
ことは目に貴し財役失ふことを思する人とありて終には天の罰を受一
生を誤るもの。世間の童蒙めし此本を看あらば能々記者の意を測の
老婆も言葉のみ斯て米次郎ハ家に帰り妻子らへ窓を自己の
宅へ入さへも四辺見まはして稼嫡も荒くハ鳴ねど中舎のうち弱々夕便よ
人にぞも自ら気と心よき火燵蒲団を被てそろつくと尚わまの

ふゞきの思ひ出して居るやどかひや芙蓉とありければ。下女のお袖ハ
あく気あり 袖「旦那さんお膳を上ませうか 米「イヤまだ食たくねへ
ろう後に仕ませう。お袖義母さんハお泊ざ 袖「ハイ此子の会にお出在を成
ましたと 米「お袖ぞう用のあらハ呼つけるで お寝しなさい 袖「十二行までも
義成ハ存ませんが。お若旦那さんも旅帰りでござりますれバ今晩ハ宜かも
しれません。今朝お早くお帰んなされバ宜ござりましたのに 米「それよでうて
大変な騒で帰りとめ之だやね人ろ 袖「夫ハ左様でも義母さんが御自
己ハ知らぬ振りして居ますがお郭の者の咄を済ませてお帰で。

夫でうくさんをお待ちまうけるのでござるまいぞ。ち様さんの
一件でもうのびまいば一日やそこらのうをも。左様ハ仕作ませんぐらすぐその
うで待ちまうけるを待で入ちやう所でござるまいぞ。摘のうの為ばかりを
拵ひとのでござるまい米へ五穀ばかりけしでチン〳〵見ぐらう。そん
な水流きのうをトねんでも宵さうみんぐさ。そこで四条きんの四傷
ちとやはりめでぐるまいば義母さまを待くかう世話ぐらまいら。
あるを休めてあ上りさいまいトいハ損で出それば米ハ為ハ見送りて
一時一己ぐ身の行状の善ぬるを願ひて兎ふも角ふも待うべ。

かくて夜も初更人通廊ハ番頭ぐ格子の中ふ帳面を操ひらげ。
笠を脱へてぞちらくと其猛を弾くハ。その内の出入初ぐ多ぐ若
者暗き片隅ゆて。密〳〵勇ずハ一切往べの悦物ぐ。酒市ハ
酒をちらまきくを反紙を拵ひて。淀川ぐ〳〵夜ぐ酒ハ。
鎖の真ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵ハ。ハ九〳〵を高ハ〳〵そ〳〵ぐ〳〵ハ
見えて稍ぐ世間ぐ〳〵ぐ〳〵のお杜ハ徐〳〵米次郎ぐ〳〵金ぐ米
ハ。米次郎ハ見て起あり。物をも言ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵
ある。お杜ハ傷へ方をあるて杜コウ果ヤ出ハ行時節ぐ米ハイナニ

騒ぎ親類の手前もありますと　扨左様な訳じやア一向済ませんと形言ふらしサテ
悩ともに思ふぞうらうが。お前さまご承知のうち父御さんが死まして。それから
後は私の丹誠で児供も育て前の通りも彼是と世話をいたし居りますが
有難いことに今までは他に後指さされもせず。一ツの家を暮して参り
サア今回息子が女房を持せやうと見るに女親の甘い育で。如何な
ものが出来ようと言はれまして。わたくしの当人は覚悟の上で身を慎み
と深くきやうと嫌ひねへがなんとして無理やりにも娘を指で摘き
只他に言はれるのが残念でなりませぬ。お前さまで居候をいたして

帰るのであらうと言て見ると全他の家の嫁で有ますので息子が
行届かぬのでござります。とかく一ト筋に思へば、お前さまもモウ六十に余りますなど
いふ。頓と嫁でも娶て母が看病で独りでゐるのもさみしう、自然に手形
するも出来ぬ訳ゆゑ。夫も気が附てゐるならば、どうぞ何卒
長々の辛抱で相応な嫁も貰ひましたれば、あとは孫も抱いて遊んで
その跡へ世帯を譲つて、家内も揃つて睦しく、ぢきに運んで
孫も彼の嫁の始末によりて見れば、私も他に楽をさせず。是より
万一も不埒で嫁を苦しめるやうなことがあれば、お前さま他に合はせて

[illegible]
[illegible]
第一親おうちで業をなさる人が多く他の[illegible]
[illegible]。人物決定で相撲が出来ない人は左稽古で早く合体する事時
[illegible]。お祖母さん達稽古に出掛ける日は夫ぶり相撲の方ハ何稽
[illegible]冥土の[illegible]ノッ。まさに近イうちに何稽古をして[illegible]
[illegible]。[illegible]仕[illegible]
[illegible]世間[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]

[illegible]稽の[illegible]一の言葉が[illegible]。米全体を垂れ[illegible]
先ぶ。相撲生へ徒の正[illegible]。神や[illegible]数用左右言[illegible]
どぶいまだ[illegible]。[illegible]往と[illegible]
せん。まさに一個の[illegible]を上[illegible]の信所[illegible]
ねべば。辺の[illegible]幾[illegible]
ぶぶ。竟[illegible]間を[illegible]
[illegible]。[illegible]通り。他人[illegible]
[illegible]と言[illegible]。[illegible]

いの音ばかりして見届け彼地へ行と言ふこのごろ人の
ちらこそ言ふなれど思の事で解らぬ
問おくれ。時に兵衛殿お帰なり。是非も帰て来ないがよろし
兵衛殿ちやうの一振ぶり者
るるふ。哀る事の番頭の新しく
ろく。相撲を仕廻て見やうとて
事を仕組を組主殿の相撲
めるふ。兵衛殿公の祝ひ。賀の祝ひ。

あまを図て。脱ぬ深くもいひ捨せ。
俳諧いそのもの性平生の文体
俳諧の時も深く優しく美。いと哀草くれ。唱歌ハ
ろうかと母の一言然くとも母親頻へ
中とのバ浜病町の程家住る
ざまと今月の月を楽う
母を養ふ孝行様後そのうへ先頃世話
ゆも。文の道を矢へ断ひ
感心く。夫ろう妻ゆと手紙で言

後の閑寂親類中へ分論して母閑居を義務のごとくその後に
なるべし。里俗ではそれに入さかりゆえ母人の病に於て出里をもと
新しく見えんと思ひ侯べし。丈夫人多く月日を経るにて
今八彼所に居られぬ事とぞ。孫に肩面とき處女なれば孫人に話
されば始めて見人に世人のうもわかりて。漏なことを言
出さば母まの所にも面目なし。とおもへばめらに八出きねど近くちに
彼所に住て出里母まがその後居ぶ遠国なれば彼家にもせんとなき人
年七母まのものがよりも名とへいべいべと定めて居るけりよう

する間に隣人の密よりの種の告げとまべ母も此方へ入跡に米炭
薪八密もやらべ種くおのれ回らるもに出里を渾家とこうべ共べ多の
乃理にて清潔の方へ関え連二回のめと思まんとまもまさ乳ゆて
まどそのうち年の明ならば宅を持せて不自由なく養ひ意も易
きこのうまがその時八手付よと縛太らに猫を寄せて一日二回を平
けっ麦に清く助生き世の二個八肢に死んと覚悟の折ら。他の人
久知ねども深切なる詞に諭され悲しき交雑に仏を
善くも拘ッに実ねども死を止まり老女が跡に引添て十八六

町も行けるとき老女ハ其所なる路次ぐちを過り西側ハ
女モシ私の宅とてございましたが塚ハモウ塚を入まるだりの隣家近
須つづく薄今ハ殺ぎとられも女なりでありハ是ガラクタ塚あいあと
思ーたも。お婆ーとうとございましたが不肖ながらまつて此のるお左様ガ
宜ございましたト路次を遠入て裸長屋二三軒目の彼是塚ヨ。瓦
落程とあけまバ立出る女児と見えて十七八いとも優ーき美麗
あそ翠ヤ又お婆ーと大遠ハ遅ろとよ。時ーごろハ千所ならまで
迎ひハ出ようと思ひまーしハ毋ハ〜〜こんな老婆ヲ迎ーくるとハて

世も安ーじハあいのサ。是でも金を持て居ることノヲ。牧路も怖いけれ共ハ
みーまーと匂引めもるー翠ヤ洋張ノ同伴ハおいでゴマ毋ハ左様路ぐちを
お連ガ出来て。四同伴ハ婆つとのサ〜〜〜〜左様久そまーしヤ路ガ賑で
宜つとナ理でお祭ガ平乳でお在ごと思ハ〜〜〜〜是ハ平素ごとも〜〜〜〜波
お上ンのようまーと〜〜所ガ減ハ稼ハ〜〜〜〜ハ物ガ汚ようでござ
まスト彼焼さげて千所ハある風呂火体をうとまれバ清〜〜肌ハ
今ハ釈をして清十二お様ひるさんる。私ども八不図ーこのでハ義母さんの
お世話ようまーて。此所まで四同伴ハ来ーまーと〜〜左様でござ

まいらせうとてアヤ此様な所へお出なされてやさしいまうしこと丈。義母様の処のお方じゃ　母　エこのお方クマア様く分解があるうぶ今ふ性さう　左様久サアア

皆さん山方へおトンあさんもーヨ　侍　左様あら山兎ゑさんもート　お個

るぐらい上へあがるべ狼いぬを沒で出ー。お個が風俗を脱出と見て。不

測らーき思入なり。當下母ハ狗草を吸分て　母　アやく。待瀬ハ亜の様不

思ぶ歩行て見ると侍程あるのヲ　母　侍ら書へヨ。仙様ひふ性ー

とゆえ　母　ナア二条張世話ふ者ーとゆ。ぐるみ　母　左様久好ねえ丈

でもアノ様ゆをさる人のらふ思ア。歩不内へ入まると言へうけよ。まる

世話ふ者ーと仰ふ。彼様な寂家田舎人ゆーふ性ある　母　左様侍程

ある庵ーくしへるヨ　母　そーて今さら他の世話ふやアゆ様しそも成れ

るへハるもと言て四流生活一向おるるらふ社ゆうみゆく

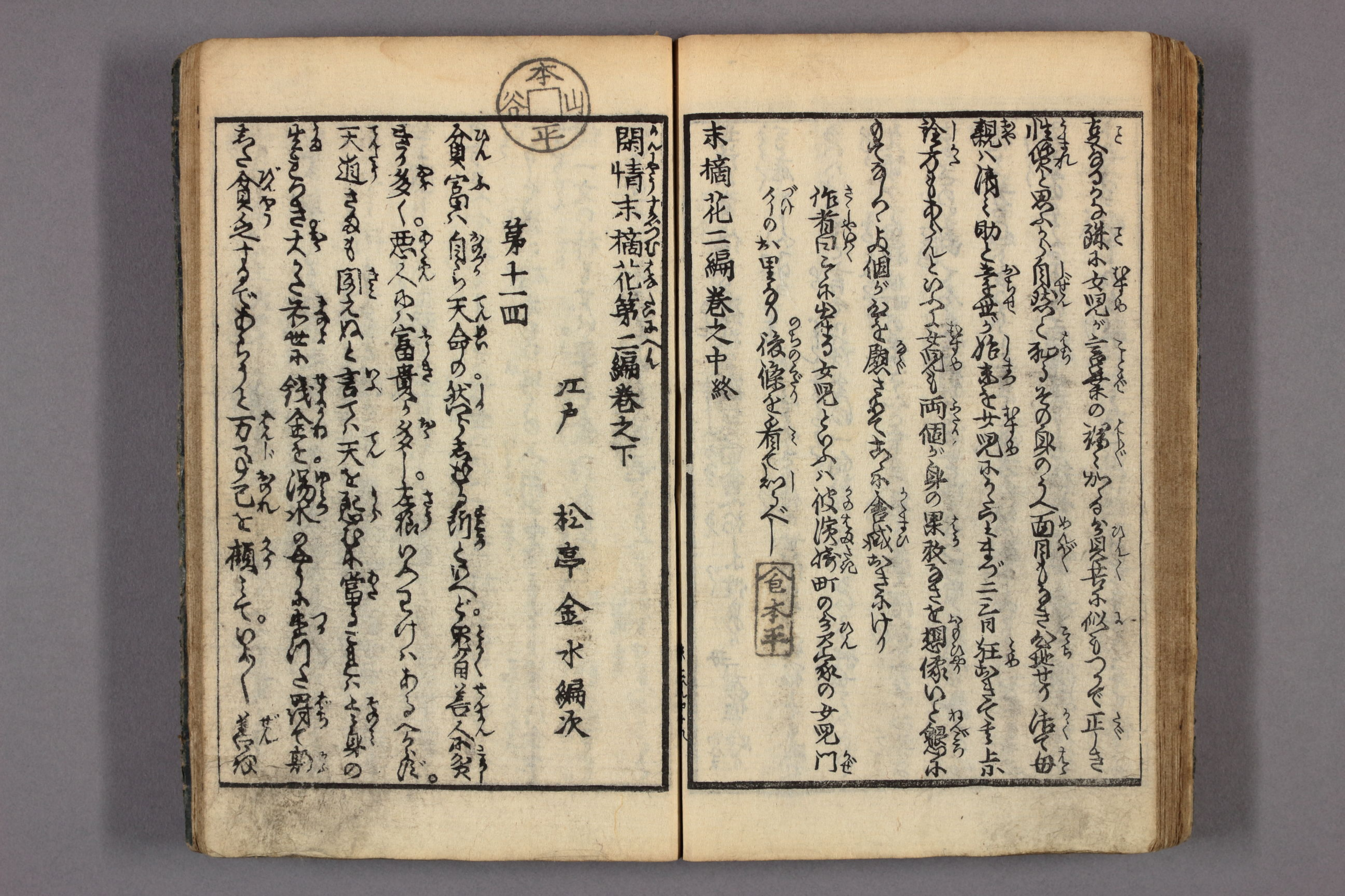
先頃アノ白羽根町の米さんと申ーが鶴く来て深切ふ言て居ると

さらこのを断て今まと別の人の世話ふるうちやアゆ義ゆ侍るゆの

程ヲノ考ゆ和ようのらと言ても此方の紀ゆ和ーいらう　母　お米ものー

老年のもうるとをらふ腰ゆ者ー左様ゆを持て居まべ同遠へれ

ト母ゆが働ーの分解ハもうねと白羽根町の米さんとさそも似ゆの



夏のうるみ眼ハ女児が言葉の襟に掛る気風ハ似もつかぬ正しき性質と思ふ内月毎に和らぐその身のうち人面月もうるさく紛せう佞て母親ハ病に助と共世を拾ふ女児ハ内ゝ三月狂おさえ手上ハ冷方もあくんといつて女児ハ両個が身の果敢なきを想像いと愁ハ

のそなつて夫個が幸を願さまそあくふ倉戒おきふけり

作者曰ハ世ハ女児ハ彼渡橋町の今平山家の女児門

イのお里なり後像を看てわかべ

倉本手

末摘花二編巻之中終

本山谷平

閑情末摘花第二編巻之下

江戸　松亭金水編次

第十四

貧富ハ自ら天命の然らしむる所なれど。男子善人ハ貧きを多く。悪人ハ富貴を多く。左程にハあらざるべし。天道さまも図えぬと言て天を配ぬ本當ことハ人身の生まれつき大ゝ者世ハ銭金を湯水の如く費ハ人ハ貧乏するでもあらうと万己を頼こそ。善

勝れ。皇天受て振るべ。後ハ富貴とあり。
楽る身とあるハ必定なり他者ハ清貧なるべ疑ハ
勤むべし。備り幸世と清之助ハ濱寿町なる御里母なる
ハ感じつ。今月望と暮れ暮れ
見るべ人心病くして幸世ハ僅一二本残て在ける花も変
ぬ。そ米ハ梅。その用ハ入用ハ定まるなり月余
鏡一文の柿も甘く。座して食べ身の度と弱よ外ハ塗る。
お里母なるを。らく待絶おりべ。已の見人幸世と

食や食ずの身病人。他ハ若べき思ハ多く両個の人ば
法食を見るに甚だ人ども。まさらるも術なけれ其
ハ身ハ。物そ多くあれば。
清之助ハ外ハ代るべき物のなれば
見を法で。位の金ハ梅るも。残るべき蒔秋の茗荷
ハ清人いるして。個が金を繋ぐと言ひしも
胸迫る折る幸世ハ風のらちとうち伏すいぶ次第ハ
重り。又六月も立ぬ。着人把ぬ祝もあるべ大法とあり

ちゝび清之助へ云ふやう。侍を雖ども貧病し。母と妻と
ひをつけて勉る。主人大方ゐねど常〻深窓の下に寝る人
まして暑さ寒さの折〻ハその極くに不堪。完全して衣服ちゝ
身を今まで。頃く櫛月半に近く。透間の風も身に滑て。
漢をうまれて寒さ人も。猶寒けきを洗濯の小袖一ッを
身に纏ひ居ども。ちゝび寒の。温もらもろ温めて。
暁近く頃く亙の肌の寒きを。後で早〻に焚
火に。澤身の甘ぐとさ人多けれど。終に病こうるう。

ぬぐうこのひ。いと勉しきの在さを。今よりもか思へ
冊を傳へ。この活業を出ゆきそ。淋しき塩のうち清く
勝ハ主を。寒る。侍に居て脊と松 法へ。ぐて豆 此
冥の。先刻こゝの巻冊ぐ。豆腐に給ふ。ろうて梅ぐえ
でんぶを。煮て。来て。呉ぐる。背下ハよく寒て居ぐ
居ぐ。俗ぐ湯漢でも。待て見ねく。俗ぐ俗
ぐうこ。切ぐい。法一。夫でも左右俗も。食ぐに居ぐ
悪いなぐ。チイ我慢して。給て見ねく。ホン。私ハ俗の周果

ごらうよ物ゆをあつてくらふ二日と寝さうなのふ遠回しアア
ぢう あるんぢらうらの花よりやア。まぐるり又日や六月ほく
ありさうなるつが定めて毒小芝やかうもたまるの上これ
みてと思つて猶〳〵えがりもつて贅で本まえらう 法ハナノ 法
ねつ病れの腎八まを花みてゆ接へりんとやアわへるる役
ゆえびとも已ぶ期して居るらう案じるさんるまへゆえ毋も
お母さんも。親類へ行てまるく。信切ゐして呉るらう。何の花
間違ひ出来らアる 出来まる案さん夫左張まるまるのけれ。

金体お母さんと内証で相談して。私きやア山本の矢場へ出張
と思ふ まつ〳〵ョ左張もつと一日ゆ二両とやらの手伝ゆるらう。アア
両個で給るぶけへあるとゆるぶらう 法ハ〳〵〳〳〳〳 何様して出来
其張る吉又が出来るものゆ。夫でも大変〳〳 法ハ 何ゆ
とゆつて今の身で大勢の人ゆ顔を曝して居るも可ゆ多
そもそも親兄弟の面を汚すのぶ 法ハ左張るる上で金ゆ
表だろう出でも宜しやアるつ 法ハ今時分表見世うゆる
ものゆ。そして夜ぶつて同じるぶるゆ〳〳〳マアも張るる

苦労ハせぬと。ようくちやく使はるゝ様よしみ郷で始ぬる不
のも。實ハ親の形見一ツハ今まで温にして居ます様だと
おもひをするもんざから丈でざ自己といふ悪漢がまけまやうき
弛ふして御麗さんで居るものを可愛そうなトおもひけく心
ようまくて一番ならぬと落せバ生際ふさしく振向く その
御舍弟お母が頼くなりくる鬢の後毛そよとするふさく不清
之助が実の姨おちせハ細き指をもて拭ひもあへぬ己が眼の
あふるゝ睚をそと拭て お母「アレサ 手根なる事を言ふて おきまず

るハるハ饒べどやア。私の方が金経悪うでざいますゆへ夫不甲斐なれて
お旅さんに此振よ苦労をさせるかと思へバ涙と胸が一
ぱいになりますよ 清「ア、もうく手根な事をおつしやる。
両個が悪いからでございやく 湯が大層沸きました。サアお飯でも
給て見なさいト元より拯き家なれバ。膳も茶碗も腰の元
手さへ伸せバ用の足るものも又 洞店なるべし 清「サア飯を
よく流し 当熱いうち給なドレ 起しても参らうか おちせ「給う
まるべ直ぐト起返り おちせ「イヤよ 養母がでんぶで笑て

えぐる
鄭あり
のべ
ゆかしき
そのまま
新年
ろれ

是このざまだ。わしもゆふべは気の毒なやとんだ事を
ござへましたへ。お茶さんもお夜食におまんまをあがらねへ。おいら
きやうは精進の事給ませんから 清「今朝も喰へヨ。ホンニヤく お
茶。沢山給なせへ 弥次「まあなんでも継とお替りを仕ませう。
きやうお飯をおまんまへじやア否でござへますヨ 清「ちつとおあがりな
盛直似を喜世ふト また湯をかけてやる 喜世八お替し戴て
喜世「サア お茶さんも一所におあがんなさへヨウ 清「十二膳目おかはりはおあきよ
喰ふ。まだ腹も減ねへ 喜世「夫でも一個じやア淋しからう 又

連があると其侭食で。沢山と給まするかも知ませんのに 清「ある
かど手前もあり 茶もありますドレ 夫ならト 茶碗をもち勝手の方へ
ゆきて飯櫃の蓋をとるまでも片隅にやうやく残る八文字ほどのも
見えざる飯の粒の玉そこを喜世に暁られじと杓子の裏で
そつと盛る心配も病人に苦労させじの屈託。情の濃
やかなる所へ折から門口を瓦落裡とひきあけ。千種の股引
結城木綿も七ツ時分の羽織着てむき紀桜色を着背負
宿の内へ片足踏込ヤト あつく宅を見まはし 男「アノコウ八信

ちさんの許ごうけよ　清「エ。仕方ちと　男「左様サテ御ぞんじの通り女児の宅サ　清「エ　そこへ行方でございます。お祭さんハ
何処へ　男「ハイ　ここ　やア北里の一浦　奉ります。今夜ハ御留
すなと　清「ハイ　男「ちとでございます。何の用ぶ。何ぞ私へ
左様　清「ハイ　男「ナニ私　やア北里の一浦やうの品を持
て来ります。ぞうど出ん　清「ハイ　男「ト一通の手紙を出す。清「助人ちとあげて　清「母さま
お母さま　秀「ハイ　清「ハイ　男「文書

お情ん　やまと　男「門口ぐちと建て豆腐ゆく
時　清「ハイ　男「北里の一浦　清「左様
ハイ　男「関　清「左様　男「役所　清「左様
ハイ　男「左様　清「ハイ　男「三左様　清「ハイ
仕様　清「ハイ　男「左様　清「ハイ　秀「ハイ
何　女中「遠人　男「公易　清「ハイ
ハイ　清「この頃　男「吉左様　清「ハイ
ハイ　清「ハイ　男「清さん　清「ハイ

アノ主人世さんハ此頃ハ宜ござりまして　清「ハイ有ごゝう。お祖母さ
大分宜ゝようでございます　おせ「ヲヤおゝでかしなさ　清「ハイ。先刻く薬
湯ものを有ごゝう　母「ハイ〳〵　お祖母さ「ハイ　清「ハイ
其美味　給まうしく　さく「そうもアア宜ゝうされくまこと三だス／お土
産を差つて参ること　母「今のものをあげる　左「ハイ。
こうもアア今さいうお祖ざ　さく「私きやアア陸分宜ゝらうとおもよ
けれどト　母「ぶ殺ゝう出ス柿四ツ　母「ハイ。
冷さくして食ごと思ふ　清「ハイ　母「ヲヤ〳〵ずんごりく勢柿で

ございまして　清「ハイ止まれば宜実ハ　お茶お祖ぶ茶浅と生茶
ちやア、どうも乳の毒でゝ　さく「ハイ　左「ハイ
配ふ上でお呉さい　母「ハイ一寸その庭丁　清「ハイ
取て来ます。ホンニ北田ゝ来ること　さく「ハイ
ます　さく「ヲヤ左様でございます。有ゝう。母「特上さんの
御ゝ様が来ること　左「ハイ久ゝく　住ゝ。
お茶漬で見る　さく「アイト　左「ハイ
家ゝ　左「ハイ。母「ハイ　清「ハイ　母「ハイ

内ふ来て母に言ふと言て来る。母へ左様。どうせ自己も郊
外へ。住うと思うて居る所ぢゃ。二三日のうちふ住て来
やう。左様して呉まる。先ハ近くうち。大方気を
様で居るさるぶらうとうとト母ぶが結髪を直して見まし。
お田ぶが姉ハ一三歳。勿の身とハ思ひとおもう。身の穢
命の是非をけまぶ。変しくやまとぶ。不得面のやう
ぶんぶと母ふの心を推察して。法を助ふ同せぶ。仕ぶ。

第十二回

人窮して巧をるるとと。古き文史のふやまと。清之助と妻の
両個ふ原有福ふ貴ちし身をて公ぶるとの分員ふいと堪
ぶ人おすぶ。人ふも限まぶ巧をもまぶ。ぶ已ぶ身公
顔ぶして。後悔ハするものぶ。最初ふ覚悟のる
分ぶ。ぶ。ぶ。

まで気や角と。あるいい迫るも女の情あるぎさの情婦長
解けて赤を唱のく今胃も母子共活業とせる晩と呂両
個寸毛ハ例ようこと乳持もようこと蒲生のよ不乾ようと風呂
ふるひける土瓶の粥の煮ら加減を見板よりそうき呂ども已
らぬ西瓜。翌ハこと。て初しての立面も今ハ長果て清く
助ハ仕息つき 洗へ寸 寸毛ハ 岐板よで 麻しいと人
のへものくモワ 仕るも活るものくるトりて他ふ猿ハ獨ふ
この二三日ハ九ッきり出所の母子が 棕を當ふ長毛 縄で長ら

けさで。知りての通り彼母子よも間の宜晩ゞ二百ゞ三百掛る
ゞ悪のと人十ら六十銭。渚えハ貴し各くの世るでるのくなゞ
ろしの夫を知ろう両個ゞ食潰しても長ら毛め今歩見
つまゃ お里農が半天もねく容ふ自己達ふ関せこう色の
毒ふ思ふふと。密と曲でも仕さのうとおのへバ獨く胸ゞ痛
ふって。波も個ハ通くねく何とこア 何孫しこう宜ら方へ
スイサ 私も仕ろふ。痛くと考へちゃア居ます仕けまで空ふ沉
ゆゞつきます。所治親類や何人新と明て毛をする

こんな訳でもあるまいが。いかさまの夏清さん。山
同様お里さんの姉さんが。三浦屋くやみ暮るるものの其
手夢で私を北里へ連れこむ。左様しるふ何れ操
致が悪くツイも十あや十五あるやうそのみのの其外金で
お里さんや長母ゆも今までの厚い世話よりこと捨もちろう
まこと糸さんも身形でも捨へて。何様ち仕法をお解きなナ
エエ。悪いヨエ清さん。何ぐよ手紙よ塞いで居るのでも相夫よ
あまみこへ 清へ書手紙を京をいりて呉るさんみ自己病が

一ツ。のふ引て。何く接殺をして宜ち却とうくうふ
何の故エ。お糸さんも元の弱へ私ちや 清ちう命までお糸さんの
あげて盃のごあり。手伝ふ工人何ちも思へ仕ません矣が
うぞ元ゆでも賞ちさのく 清へナ手 気ふあるゆでやアねく
お糸がようくうまくぐそ手紙ふ 気ふるけちう。是ちのふも病
自己が科ぐと思へうう。実ふ可愛さちでうふねく
左様思ひてお呉ふう。宅ふ嫌しのがふ。左様だちう言て居さ
つて果しもつぐ。一日延ばず一日ぐり金ふ苦労をさる

斗ざくらア跡ハ死も苦も左程まる方が宜でやアないろよ
法へそうやア當座の虐ぎふやア宜うもあるとねへが自己不業
ぢノ家一個ふ苦しまして其の金で自己が楽しちやア
まア外一人様が困ル史どやアねへか然して家の美物ッ兄
さんふ勿論ごとひとまでも言沢の仕様ッねへ。ここの俳
諧命とかいても。手紙のうめうるめうみ文ッまア
お家こを如何ぢやうとか思ひど立場へ他の様とかして実ふ者
成まるだろうで一句張が付ねへけまど自己一人ッうト言

ッけて居ッる。顔を覗きこめ（自己一人ッうト他の様ちの
ざ人ェさア言てか同せるさらナ。そまーやア私が私して一家
ふ居るのが邪魔ことか言の人ッ又私が邪ナふるうふ
今も中通ッ居ッふ命まで殺ッて居ッ私ごのナ他の様
でもいって仕方まで苦ッ他ごと言てか同せるさへコト考ッる
ませて男の気をつくづく見まど面様て眺日ふ考ッる今同の
憂きその他のこッろの身さへ人ッ魂くッうッん私ッ教を
殺しこる。焼ませこふるきものこ人ッ顔を見ッよッもッくみ

物らしき姿形はありはけん。人の知へ花深の稼らるは易き物と
きく。因果八幡信実は優なるき人も世ふつまてそ色あるくはのの
ちくひあり。今ハ此身を跡まく。男ゆゑの言葉ゆとと思
廻も偉ち多の稼。わくまの根先のてまでも苦労はあるく人女
子の気性。爪角は分て先くこわく。涙の露のあくまと拭ひも
のくねを清之助。見るとう偶よ涙ぐく清へコサ手拭は洗て
ほんのさんのョ。そまーやア横くに自己の気が横侍くて仏花くて
貴うちくくちくハナ。今自己一個ぐく。仕様がのくくこ言くのハ

他の支ちやアれ人実ハこの近所の居地金の山で自己と呉
服屋婿よ兼ひくとくいくきうぐらうサ清へコヤ左様久そんなら
おいとうきくいナ清へ左様久ハ新ちやア。きくくいの様まるきくへ私久祝
きやアきくくいの様ハ横くくまくつきアア。横くくまくきくいの様仕
きまきうハナ清へ仏様くくまくきうドやアコロくく久。伝言でもして
宅へ帰くくれう。きくへくうんが私がいくぐちのくい女ぐくて清くんと
一緒ハ出くくう。横くくまくくく

桜ハ[illegible]。私もまだお嬢さんの真実似をして。そんな三平二脚ですと
宜しう女房ネーてやらうとの人でもめつて。縁付ませうか
清へ[illegible]。こりゃあなたもしまえ[illegible]
[illegible]。実[illegible]人のいつぢ[illegible]
[illegible]の花嫁ゝ花聟でも清ぶれ人ものごとやつて[illegible]
[illegible]で[illegible]の人ぐ有[illegible]
世間へ[illegible]で[illegible]のサ[illegible]
[illegible]町の[illegible]の[illegible]を見て彼桜のいく女児を

め、して、金の八情へものごキン自己が女房の[illegible]。准備金
の[illegible]千支位ハ[illegible]と言さそうぐ[illegible]早速その[illegible]へ[illegible]
合て見ませう。[illegible]の身うぶ。先へ居付れ人けつやあ
[illegible]が[illegible]ねえ[illegible]十二[illegible]様へ[illegible]ともお嬢様の身を先へ[illegible]
[illegible]でお仕[illegible]さの子。夫でもう[illegible]ちやあ[illegible]ハ[illegible]自己の
[illegible]とのうあ田舎ざ[illegible]ヨヤ今[illegible]近所の居付地
[illegible]。あ[illegible]やあ[illegible]清[illegible]十二[illegible]やあ[illegible]
里の田舎ヨ[illegible]先へ仕[illegible]

の落付を見て　仕方がない　一アサ　松木樣へ入りでまきいと
やまの木然してキヤア　出家きんヨ　お弟さんと　祝ひ申ず　祝ごと
のようとこへ　近所でも大騒　祝ひて居ること　お木さんが　祝して居
ざやア。他も　さきの方で　世話をしちやア　呉ません　夫ぶらぶらこの糸
祝ふ　先へ　身を　片付て　お言なさんわと　夫張　今ドロ　ろくろ
トいふを　聞て　清之助へ　私の　理ふ　長沢つ　清　可　夫ろう　お長
いの通ろふ　仕やう　然し　他不　聞し　こをすると　やし　他張ごの　祝
ごと　所例ごうぐろやア　五木　物不　おきあて　自己　八百　喜と　学

末二ヘん下千六

ろう。弧落でもしこらこらこ　意所ふも　お里　濃ふも　言て　ちきヨ
ちきて　左張　仕ちきせうそこて　ちきさん　行時　お出ご　清　左張
ふ時でもいこ　ア　ないふしろ　今　祝ふ　世張　人の木　ちで　仕て　聞て
見ちう。三ン　方一ン　の　仕　浮ふ　ごア。　ちきふ　仕ちきうごこ　五木　ちきて
ちきせて　祝ふ　絶ふ　ちきヨ　やうぐれて　清へ　左張ごけちこ　祝ふて
ちう　一森ふ　五木　見ちこ。　五木　ちきて　ちきヨ　ちきて　ちきて　ちきて
早の　方が　宜でやア　れへう　ちきて　ちきて　ちきて　ちきて　ちきて
別こふ　ちうものヲ。　ちきて　ちきて　一　同　一森ふ　居ちて　ちきて。　仕方へ　ちきて

ねえ。それ丈ぐらい清さん。ぐらぐら近のうち手紙来て
清へ。どをへ。何故もものんだ。私の身が何程あるか。
おくまでも何ドやうあるか。ものの形のうちあやまり出
遠へねえ。拙をも聞ふ来やう。それ丈もちろん
縁対のヨ。清へ。アイヨ。清へ。ドレ丈ぐらい仕て来やうアあ。
段り深ぐらねえ。ものもねえ。それ。ずいぶん連者で居ると
上りて。あの有様。常の長さ。ふうとえて縁
縁切の後です。きまれ互の深実を不斗とうく風の流れ来て

あちふ廉くや青柳のゆとぐつまるき仏の底を互ふ絵太の
塚の時宜清之助ハ。えるぐらい。幸金が方せうち見やり思ひ
あつ気ふ。ぱ息つき。やろうと落ち一番を見せでと横で
様とうてその侵門を出んとすれバ。当下幸吉顔をあげへ
清さん。清へライうんど。ちょ久。清へ何時まで言ふ
全くるぐ。近いうちく。来るうく。何卒そき日までの何様
ありとお孫の身の上づきをしてえるヨ。出て仕ものも丈ぐらう
ぐどうも苦労ふ。ありてうくねえ。そうやう。ぱ

の松が身ハ孫付とも。宅へ帰るとも伺ハるべ
き。左程せん方なバ安堵すらアドレ邪魔の這入られ
ぬ。世話人の方へ往て見やうト思ひ切りて建切る障子。去程ハ
今さら気も移乱。移乱うと斗つゝ平伏て。煮しハ敷きこゝを
けるが。気を把直して起上り。棚の隅なる視箱思ひ出る
硯。うちたゝひ立て嫌く手近なる。土瓶の口より次ぎ入れ。
茶碗六分の視の濁り。義こゝる間を。待ゝゆびをまて
拭で。涙とゝもに拭ひつゝ。在あ人皇紙うへとうてさらゝと書

文字の関係人帰且ゞ手こゝ。秘とゝハあ且今死わる。
身ハ手こゝ。帰るべきこゝの無こゝて頼こゝあて。おゝも情
まゞ敷ゝ。涙くゝ付。涙こゝて独云。手涙こゝ
ゝ。ふけ且ゞ自然ハ涙ゝ。嘆ゝ。親の母ゝ
ゝ。ハせまゝ。海ハ先ゝ。往昔の人のゝ有理
此方ゝ。ゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ

人を怨むハ猶く身の罪お祖師さまやお釈迦さまの世ハ
この身の不幸ゝ。人並でなの死やうをいつまでも大世へ
世ゝ。可愛そうゝ。ごく思ひ出お祈ひまうてやきこへまゝト
楊枝ハ笑ふ一本の指を組合せうく拝ゝ伏深てぞ居ゝ

金龍樓蔵書

伊勢熊

末摘花二編 巻之下終